

つて来てくれと頼んだ。

そをして僕は凝乎ねてゐる事が出来なかつた。

床をぬけ出て、着物をスツカリ着て、毛布を肩に掛けて、頭が寒いので、野田の大學帽をかぶると飛び出した。

近くの加藤朝鳥の家へ行つた。

朝鳥は居ない。

天草生れの二十貫もある、朝鳥よりも大きい女中が、まあ話しなさいと言つた。

彼女は鈍感だから、僕の狂氣に氣が付かない。

僕は西洋人の好く吸つてゐる、口の大きいパイプがあつたので、それを啣へると其處を出た。

黒石の家は雑司ヶ谷の質屋の横の突きあたりだつた。

焼芋屋に澤山、芝居や活動のピラが下つてゐた。

僕はそれを一枚呉れないかと、亭主に言つたら、言ひ方が横柄だとヌカシて、亭主が怒つてくれなかつた。